# 図画工作教育講座４　《　絵の具　》

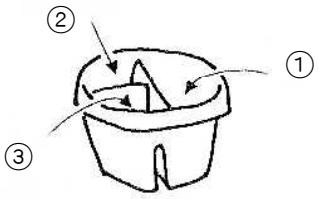
初めて使うときが、子どもの興味関心は最も高い。
このときが、正しい使い方を身に付けるチャンス！
自己流で使い出してからでは、修正が難しい。

**筆**

低学年では空間処理として背景に色を付ける程度なので、大筆を１本
中学年は、大中２本程度
高学年は、大中小３本程度　※「目安」なので１本でも可

**水入れ**

授業中、水が汚れたら水道へ水替えに→水遊び→教室に帰ってこない→授業時間のムダ
そこで、水替えをしない筆の洗い方




① 最初にここで洗って汚れを落とす。
水は濁ってくるが、かまわず使い続ける。
② 次に洗うところ。水の濁りは少なくなる。
③ 最後に、ここですすぐ。水はほとんど澄んだまま。
この３ステップで、１単位時間の水替えは不要になる。

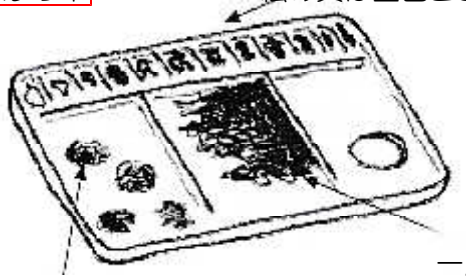
**絵の具雑巾**

絵の具は、「水加減が命！」絵の具ぞうきんやスポンジを使って筆の水分を調節する。
水が垂れるポタポタ筆と水不足のパサパサ筆の中間が、ほどよい水加減。
筆先の絵の具と筆の水分で「濃淡」ができる。
この濃淡を活かして描くことで、水彩画らしくなる。

※　水加減は、経験でコツが掴めてくる。経験(失敗)を重ねることが上達の秘訣。

**パレット**

絵の具は全色ここに出す



この部分につくりたい色を
１０円玉くらいの大きさで
混ぜてつくる

Q 使う色だけ出せば、無駄がないのでは？
A どの色を使うか、子どもはまだ予測できない。
Q 使うときに出せば、無駄がないのでは？
A 子どもは面倒がって、出ている色だけで済ます。
初期は、もったいなくても見通しがたつようになるまで、全色出す。

一度の大量に色を作ると「べた塗り」になる。
もったいないからと「ついで塗り」をする。

**ちり紙**

水分の吸い取って白さを強調

パレットの掃除に活用

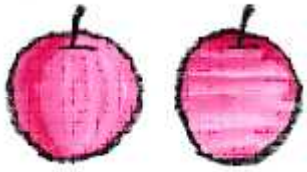
パレットの汚れを　水筆でなで回し　ティッシュで拭き取る

絵の具の技法

厚塗りとうす塗り

筆の方向を考えて塗ると、丸い感じが出る。
穂先に絵の具を付けると、濃淡ができる。

筆の方向で・立体的と平面的→



点描

塗るのではなく、筆の先に付いた絵の具を置いていく。
点々塗りとかチョンチョン塗りとも言う。

黄土色と朱色の２色で点描→

重色

赤色が乾いてから、白色を重ねると重色ができる。

生乾きの青色に白色を重色→

ぼかし（グラデーション）

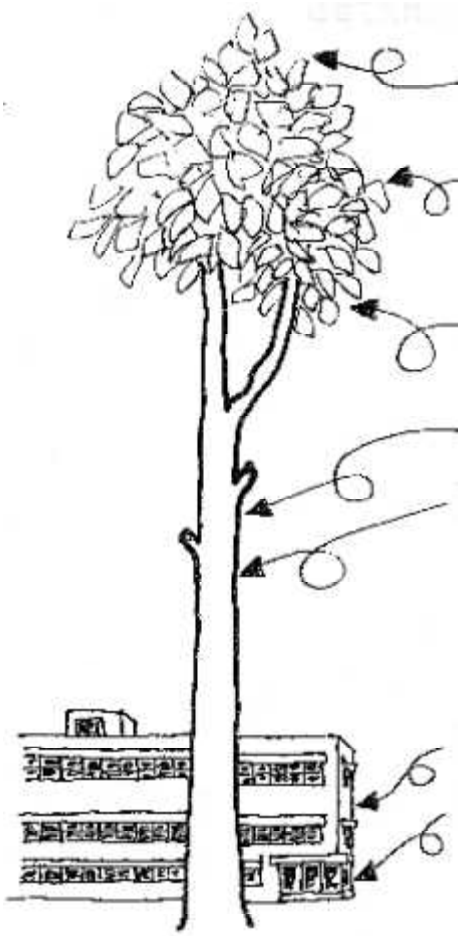
濃いめの赤色を塗って、少しずつ水を加えながら塗り広げていく。

黄緑色のぼかし→

にじみ

たっぷりの水筆で下地を塗って、赤色を垂らすと予期しないにじみが。
にじみ遊びで楽しみながら感じを掴むのもよい。

反対の方向から２色でつくるにじみ→




「葉っぱは緑」と決めてしまっている子に、実際の葉っぱと絵の具の緑色とを比べさせて気付かせる。

※　教える必要はないが、知識として身に付けておくこと

色
- 無彩色 → 明度　色の明るさ　＋白　＋黒
- 有彩色 → 明度　色の明るさ　＋白　＋黒
- 有彩色 → 彩度　色の鮮やかさ
- 有彩色 → 色相　色味　赤味とか青味とか

３原色
- 加法混合　光の混色　　赤＋青＋緑＝白
- 減法混合　絵の具の混色　　赤＋青＋黄＝黒（実際は黒濁色）
  - 正確には　赤紫（マゼンタ）＋青緑（シアン）＋黄＝黒

**説得力**　子どもの心に響く話と響かない話

「教育は愛である」という全く同じテーマで聴いた２つの講話

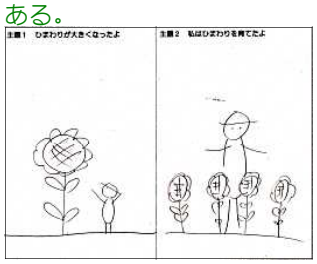
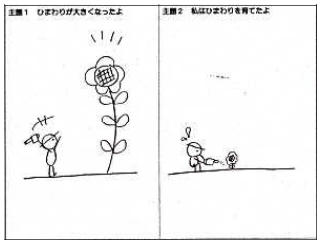
| | | |
|---|---|---|
| レオポンを育てた阪神パーク飼育員の講話 | 体験に基づく具体的事例 | なるほど！共感・感動 ○ |
| ある研究大会での権威ある○○先生の講話 | 専門書の参考事例紹介 | まだ話すのか　　退屈 × |

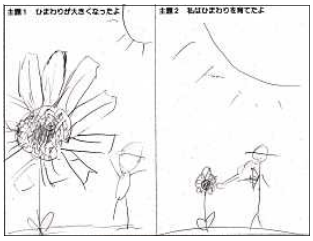
※レオポンは、豹とライオンの雑種

体験にはたくさんの裏打ちがある。話はその氷山の一角だから重みと説得力がある。図工の授業も色々な知識をベースとして持っておくべき。３原色も教える必要はないが、知っておいた方が良い。

レポート　私とヒマワリと基底線の３素材で、２つの主題を表してください。
ヒマワリが大きくなったよ（ヒマワリが主題の絵）
私はヒマワリを育てたよ（私が主題の絵）

次の週の授業の初めに、レポート課題の作品をパワーポイントで紹介。
特徴的な作品を取り上げて「何処がよいかを解説」する場合と、全作品を紹介して「自分にない表現を見つける」場合がある。



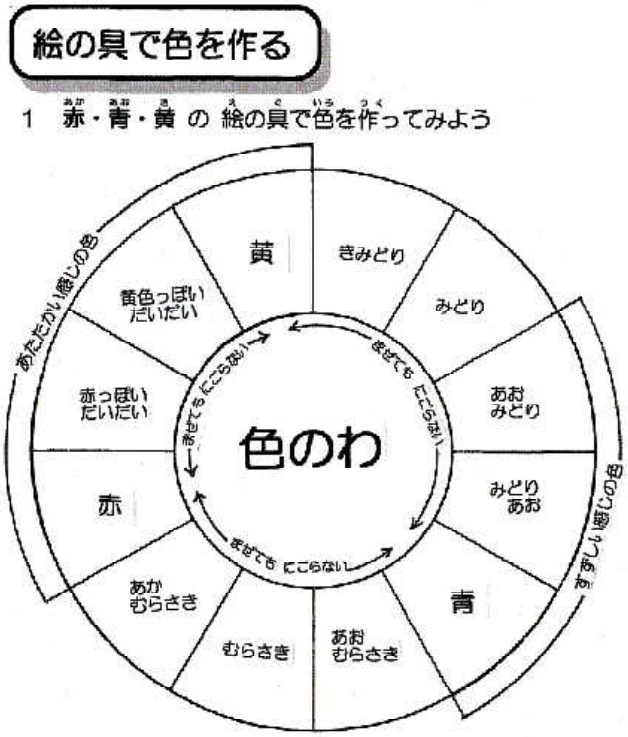
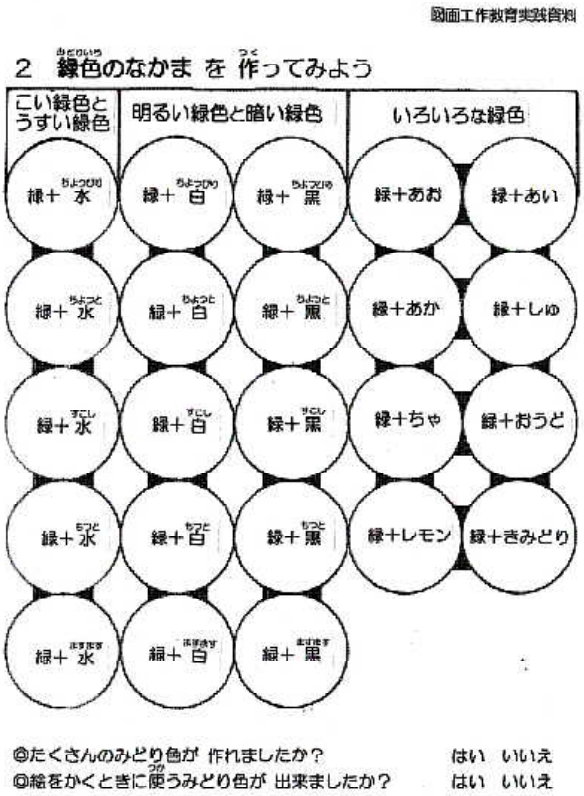
＊　私がこの講義の中で重要だと感じたことは、絵の具の塗り方に関してです。
なぜなら、私が小学校のとき、図工の授業で下書きまではとてもうまくいっていたのに、絵の具を用いて色を付けると、何故か失敗してしまう悔しい経験を何度もしてきたからです。
だから、絵の具の塗り方の具体的な指導が重要だと思います。

＊　小学校の先生は全ての教科を教えなければならず、得意・不得意な教科があっても、「先生は何でも知ってる！。何でも上手！」と、生徒は思っているに違いありません。当時の私もそうでした。
実技を伴う教科では、知識がないと、生徒の作品を手助けして、満足のいく作品にするのは難しいと思い

ます。今回の講座では、絵の具や版画など具体的な扱い方や技法を、小学校で教えるという視点から改めて学べたので，すごくためになりました。

＊　やはり図工の授業をしていく中で必要となってくる様々な技法が重要だと思った。教師となって児童に教えていくときに、児童たちが楽しく表現できるようになってもらいたい。そのために教える側の私が、点描やぼかしなど様々な技法を理解していなければならないと思ったからである。

＊　思い描いた「空の青」は一人ひとり異なるということは、簡単なことだけど私自身気付いていませんでした。「空の色はもっと濃いよ」と指導するのではなく、子どもの「もっとこういうイメージの空にしたいけど、どうしたらよいか」という悩みにアドバイスをすることが重要だと思いました。
　私は、小学生のとき「上手だね」と先生から褒められる作品をつくりたいと思って取り組んできました。でも、上手だねと褒められることを望むのではなく、自分が心や頭の中で思い描いたことを作品を通して自由に表現することを望む子どもたちを育てたいと思います。

＊　初めて使う道具があったら、正しい使い方を刷り込むこと。

＊　私は、教師の知識やデータベースの豊富さが大切だと思いました。
　私は小学生のとき、図画工作が好きだったけど苦手でした。描いたり作ったり彫ったりする作業は好きだったのですが、「工夫する」ことが分からなかったのです。先生からの作品のコメントは「もう少し工夫してみましょう」や通知表の創意工夫の項目はいつも成績が悪かったのです。私は工夫することがどんなことか分からなかったですし、上手な人の絵を見ても真似になってしまうと思ってできなかったです。
　この講座で、実際に子どもの手を取って技法を一緒に描いてみせるということを学び、工夫するってこんな風にすればいいんだと思いました。私のように工夫が分からない図工が苦手な生徒に、教師が知識として技法を知っておくこと、そしてそれを伝える方法を知っておくことが必要だと感じたからです。